だーホね

呪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
だ一ホね

【Ｎコード】
Ｎ７２７８Ｚ

【作者名】
呪

【あらすじ】
上梨完二は転生者である。
ここが生前あまり興味のなかったＩＳの世界だと気付き、動き出した完二はＩＳ学園で薔薇色の学園生活を求めて動き出す！

※ヒロインは一人です
※原作が大崩壊しますし人によっては嫌悪感があるかもしれません
※ある意味で残酷な表現があります

（前書き）

そんな事より友情しようぜ！

よくある話だが、日本人は無神論者である。
もう少し詳しく説明すると、絶対的な神様は信じていないが、神様だろうが仏様だろうが稲尾様だろうが居てありがたいものは拝むし、居て困らないものは別段拒むような文化ではない。
宗教を足して割ってを繰り返した結果として、外人からすれば一神教からかけ離れているので無神論に見え、日本人からすれば究極的な多神教故の無神論なのである。
で、何が言いたいのかというと――

「マジで神が居やがった……」

姿形は茨の冠だった気もするし、月桂冠だった気もしなくもない。
裸だった気もすれば、ローブを纏っていた気も法衣だった気もする。
キリストだったかもしれないし、観音様やらお釈迦様だったかもしれないし、もっともっと別の何かだったのかもしれない。
だが、現状で重要なのは死因がわからないが死んだ記憶があり、圧倒的な何かに話しかけられた記憶もあり、そして――あの悪名高きＩＳが目の前で起動しているんだから。

今更この世界にＩＳの説明を必要とする人間なんて居ないが、あえて整理すると正式名称インフィニット・ストラトスは、科学者である篠ノ之束により開発された宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツであり、目的通りならば高性能宇宙服だった。
目的通りならばと言うように、そもそも宇宙進出からして一向に進まず、気付けば高性能兵器へと転用されてしまい、しまいにはス

ポーツ用の飛行パワードスーツになってしまった物である。
機械の癖に何故か女性以外に使用できないという致命的欠陥を抱えていて、なまじマトモな兵器ではＩＳに対抗すらできないが為に、世界は変な方向に捻れてしまっていた。

そんなことはさておき、では何故自分の目の前でＩＳが起動しているかの話しに移ろう。
これを考えるにあたって、まず前提条件としてこの部屋には自分以外には誰も居らず、あるのも机に紙にＩＳといった物しかない。
自分の体勢はと言うと、扉から入ってソレに触ったままの状態で、冒頭の言葉を口にしただけだ。
つまり、だ。

「き、君?！　そこで何をしてるの！」

「いやぁ……　ＩＳ動いちゃいました」

女性の甲高い声は耳に痛いと体をもって知った瞬間だった。

あれから――当然ＩＳを動かしてからだが――もう一日中てんやわんやの大騒ぎで、日本中が上から下まで震撼してしまった。
何と言っても、あの女性にしか扱えない筈のＩＳが、同じ会場で何を間違えたのか男性が二人も起動させてしまったのだ。
一人は世界最強と名高い織斑千冬の弟である織斑一夏。
そして、二人目は氏素性も背景にも怪しい所の無い上梨完二と言う少年だった。

完二はＩＳを読んだことがない。
いきなり何を言っているんだ？　と思うかもしれないが、これは彼が産まれてまともな思考力を得てから白騎士事件が起こり、そこで気付いてしまった事実が関係している。
既視感とはまた違った感覚として、彼の記憶の奥底にはＩＳについての知識が、そしてこの世界についての知識があったのだ。
ただし、これには前述の通り欠点がある。　知ってるが読んだ事はないのである。
覚えているのはＩＳと言う兵器があることと、ヒロインが何人もいてハーレム状態であり、主人公の織斑一夏が男で初めてＩＳを動かした事といった触りであり、深い設定についてはまさにノータッチだった。
だから完二は白騎士事件を切っ掛けに世界を知り、喜んで動こうとして問題にぶち当たる。
単純にして短絡的な行動として織斑一夏に近付こうとし、単純な問題として織斑一夏が通う中学校なんて知らなかった。
だからこそ中学校時代は諦め、ＩＳ学園に着いて行くべく動き出す。
微かな知識を総動員して、織斑一夏は藍越学園を受けようとしてＩＳ学園を受けた事と、実家からＩＳ学園に通える範囲だという事は思い出し、何とか条件を絞って数あるＩＳ学園の試験会場の一つを絞り込んだ。
この時点では、織斑一夏が完二より年下である可能性を考慮していないし、何よりＩＳが動かない可能性なんて考慮していない楽観的過ぎる考えである。

当日になり試験会場を見て大きさに驚き、腕時計を見て完二は更に驚いた。
予定では早起きして会場前で待ち伏せし、中に織斑一夏と一緒に入ろうと考えていたのだが、間抜けな事に寝坊して遅れてしまった

のだった。
織斑一夏が入ったのか入っていないのかわからなかった完二は、中から悲鳴のような奇声のような音が聞こえ、ある一方向に人が流れているのを見て織斑一夏が既にＩＳを動かした事実へ至る。
こうなっては居ても立ってもいられなくなり、人の流れが途切れた瞬間に会場へ飛び込み、流れとは逆の部屋へと入って彼もその日二人目となる男性操縦者へと相成ったのだ。
彼は想像した。
モブに至るまで美人揃いと言う薔薇色の学園生活を。
彼は妄想した。
可愛い彼女を絶対に作るんだと。
彼は直面した。
確かに薔薇色の学園生活に。

周囲ぐるりと全世界に広がる女子の視線が、そこにぽつんと座る完二に注がれていた。
想像より視線がキツイと言う差異はあるものの、右を向いても左を向いても美少女、上の階にも下の階にも美少女、年上にも年下――は居ないが、とにかく視界に入るのは美少女と美女だけなのは壮観である。
ちなみにだが、ぽつんと一人で座っているものの、完二と織斑一夏は同じクラスだ。　ただ完二が気合いを入れて早く教室入りし、女の園を堪能しているだけだった。
同じクラスなのは同じ男子という扱いから纏められ、一緒に運用した方がいいと判断したらしい。
一緒にとはいえ、未だに完二は織斑一夏に会った事はない。　動

かしてからは別々の施設に入れられ、それこそＤＮＡから毛穴の数まで調査され、やっと解放されたのが昨晩である。
映像で見たことはあっても、会った事はないのでその辺りは少しだけ心配だ。
まあ、人当たりの悪い陰険なハーレム主人公なんてゲテモノは無いだろうから、そう心配する必要はないだろうが。

廊下からざわめき声が聞こえだし、自分の時と同じ反応に完二は織斑一夏がやって来たと知る。
ゆっくりと開く教室の扉に、周囲の女子は固唾を飲んで見守る。
女子からすれば完二は珍獣であるが、顔は普通かそれ以下という厳しい判断であり、出来れば織斑一夏は映像通りのイケメンだといいなと願っていたりするのだが、これは完二の預かり知らぬ話だ。
開いた扉から入ってくる織斑一夏は、かなり疲れた顔をしていたが、それでもわかりやすいくらいにイケメンだった。
完二が白い男子の制服を着ているとすれば、全く同じ筈なのに織斑一夏は着こなしていると感じるくらいにイケメンだった。
ハーレムヒロインから恋人を作れるかな？　という言葉が書き消えるくらいには、完二から見てもイケメンだった。

扉を開けた織斑一夏は微かに顔を顰め、そこにお目当ての人物が居る事に安堵した。
石を投げれば異性にしか当たらない空間で、埋もれるように同性の人物が座っていたのだ。
苦痛過ぎる学園生活も、一粒の清涼剤さえあれば乗りきれると一夏は今一度気合いを入れ直したのだった。

「お前がもう一人の男子の上梨完二だよな？」

「ああ。　二人しか居ない男子なんだ、完二って呼んでくれよ」

「同じ男子がいて助かるよ！　それと、俺も一夏でいいぜ」

他には目を向けず、こっちに一直線に進んできた一夏と握手を交わし、流石鈍感ハーレム主人公だけあって女子が目に入らないもんだと関心してしまう。

それが関心で留まってしまったのは、ある意味では完二にとって一生の不覚だった。

もっと早くに気付きたかったし、気付きたくもなかった真実である。

それからは特筆すべき事はなかった。

いや、正確にはクラス代表を決めたりと色々あったのだが、今になってみればクラス代表を賭けた戦いに巻き込まれたなんて木っ端みたいなイベントだ。

むしろ、その日一番のイベントは何だったかと言われると、放課後の出来事だったろう。

「織斑に上梨、お前達に伝える事がある」

これから家に帰ろうとする完二と一夏が振り返ると、そこには複雑そうな表情をした織斑千冬が立っていた。

特に何かをした気はない完二は、もしかしたら今後も気をつけろ的な釘を刺されるのかと思ったが、どうやら違うようだ。

「予定より早いが、二人には寮へ入ってもらう事になった」

防犯上の理由が云々と語り、荷物は既に送られていると言われれ

ば、こちらとしては拒否する必要はない。
千冬が来るまで笑顔で完二と肩を組んでいた一夏も、荷物があるなら善は急げと口を開いた。
「千冬ね……　織斑先生、当然俺と完二は同室ですよね？」
「……いや、上梨は一人部屋で織斑は篠ノ乃と同室になる」
伏せ目がちに、まるで不憫だといわんばかりに千冬の視線は完二を向き、意味がわからない完二は頭に？を浮かべるだけである。
「そんな！　俺に千冬姉以外の雌と一緒に過ごせって言うのかよ！」
隣で急にいきりたった一夏が千冬に食ってかかり、益々向けられる不憫だという千冬の視線が強まった気がするが、全く身に覚えがないから質が悪い。
「話があるなら私の部屋で聞く。　上梨は早く部屋へ行って荷ときをしておけ」
ここで気付かなかった自分は、まさに鈍感主人公だった。　いや、鈍感ヒロインとでも言うべきか？
女子と同室なんて羨ましいとかしか考えて居なかった完二は、同じ男子として一夏と近しい関係となり、時には連れションだとトイレへ連れられ、時には実技の為にＩＳスーツに同じ更衣室で着替え、時には女子と同室で使いにくいと完二の部屋でシャワーをしていく間柄になった。
そんな中でも一夏によるセシリアとの対戦とフラグ建設と、転校生である鈴との対戦とフラグ建設と、幼馴染の篠ノ乃とのフラグを見続けて来てから、やっと完二は疑念を抱いた。

――もしかして、一夏ってホモじゃね？

鈍感ではなくストライクゾーンに入っていないだけだとすると、建てるだけ建てて放置されたフラグにも納得はいく。

それに、新しい転校生である男子との接触にも説明がつく。

唯一姉である織斑千冬は一夏のストライクゾーンに入っているようだが、なんの救いにもならないだろう。

ああ、シャルルと一夏に微妙な距離ができていたが、シャルル君ではなくシャルロットちゃんだった。

ああ、一夏がラウラのフラグを建てている。

ああ……　寮の部屋を再編すると顔色の悪い織斑先生に伝えられた。

ああ……　この扉の奥には織斑一夏が待機している。

深呼吸をして部屋に入ろうとした完二の肩が叩かれ、ビクリと後ろを振り返った完二の目の前に件の人物が笑顔で立っていた。

「なあ完二、友情しようぜ！」

上梨完二による薔薇色の学園生活は、未だ始まったばかりである。

（後書き）

やっぱり
一夏さんは
ホモだ
な

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7278z/

だ一ホね

2011年12月24日03時45分発行